



梅園風景



特集6

「七折小梅」で地域を元気に

はじめに

愛媛県砥部町の七折梅生産組合（現 農事組合法人ななおれ梅組合）は、七折地区と大角蔵地区の梅生産者24人で組織しています。昭和48年結成以来、品質の高さで知られる「七折小梅」の特産化に取り組み、消費者に安全でおいしい梅をPRし、産地の活性化を図っています。

地域（産地）の歴史

七折地区の梅の歴史は100年と古くから梅の産地でありましたが、第2次世界大戦中は松山市の二十二連隊（堀之内）へも出荷をしていたようです。（兵隊さんの携行食品として）終戦になって食料不足のために梅の木を伐採して梅畑が芋や麦の畑に変わっていったのです。戦

後食料事情がある程度落ち着きを取り戻した頃（昭和30年頃）から高値で取引をされていた温州みかんの増産に力を入れていくことになりました。しかし、全国のみかんの生産量が300万トンを超えた昭和40年前半に、みかんの値段が大暴落し、当産地は大打撃を受けました。もともと梅の産地であつたことから梅への再転作を地域全体で考えたのですが、県下では、梅の栽培に關してのノウハウがありませんでした。そこで、その当時は徳島県で梅が盛んに栽培をされていることを知り徳島県の試験場や、農家に梅栽培の勉強先を求めました。幸い徳島県試験場に勤務されていた村上来先生が梅の栽培について親切に教えて下さいました。その当時は、高速道路も無く、夕方こちらを出発し朝徳島に着き、昼過ぎまで教えていたのだき、夜中に砥部に帰るという日々でした。約10年間徳島に足を運びようやく七折梅の産地が出来たのです。現在「七折小梅」は、県内外に多くのファンが出来ました。



組合のメンバー

梅の産地として小規模ながら、全員で取り組んでまいりましたが、組合の立ち上げ当初は、販売は各農家が思い思いの市場へ出荷をしていました。出荷の期間は約2週間ですが、前半は値段が高く、後半は安くするため、なるべく早い時期に出荷しようと収穫を急ぐようになります。収穫を急ぐと、完熟でない梅が消費者に届くようになり、又市場でダブツキ（物余り）が発生し暴落しました。平成18年度は出荷を始めて7日目に、平成19年度は4日目に通常（10キロ/6千〜7千円）のところ（10キロ/2千円）前後まで値崩れしてしまいました。このままでは折角作り上げた「七折梅産地」が駄目になると思い組合員で話し合い、出荷調整をすることになりました。だが、出荷時期によって収入が違ふ今の現

梅の暴落の危機



農事組合法人
ななおれ梅組合
代表理事

矢野 征司



地域農業を担う集落営農

～地域と共に生きる農業生産法人～

状ではどうしても前半に集中して値崩れを起こしてしまう。これを打破するには全出荷量をプールして平均価格を生産者に支払う事で組合員皆さんの合意を得ました。又、市場へ出向き直接交渉を行い農家が再生産出来る最低価格(10キロ/5千円)以上で販売をお願いして廻りました。その代わり出荷調整(出荷日・数量)の約束をして値段は安定し危機は乗り越えることが出来ました。

加工場の設立

出荷調整の一環として、組合で加工したり、加工業者に販売していますが、加工にいつそう力を入れようと、平成21年に約5千万円をかけて加工場を建設しました。

梅干しは約14トン、シロップ8,000本を製造し県内デパートやスーパー・産直市場などで販売しています。また、展示商談会に出展するなど、大都市圏への販路開拓にも積極的に取り組んでいます。

最近流行りの、食べる「七折小梅ゼリー」や「七折小梅ソーダ」等も開発し、新商品として取り組んでいます。



七折梅まつり



加工品開発

全員がエコファーマー

七折梅組合の24人全員が平成18年にエコファーマーとして愛媛県知事からの認定を受けています。エコファーマーとは、持続性の高い農業生産方式(土づくり、化学肥料・農薬の低減を一体的に行う農業生産方式)に関する「導入計画」を知事が認定する制度で、認定を受けた農業者が「エコファーマー」と呼ばれます。その後も統一栽培指針を定め、組合員一丸となり、安全、安心な梅生産に取り組むと共に消費者PRにも力をいれています。

地域との交流

生産活動以外にもさまざまな活動に取り組んでいます。地域住民や消費者との交流を目的に、梅の開花時期(2月中旬～3月中旬)に開く「七折梅まつり」は今年で22回目で、会場の「七折梅園」には期間中4万人近くが訪れ、地域活性化の一役も担っています。

梅の花が咲き誇るまつり会場周辺では、「七折小梅」を使った梅ジャム・梅シロップ・梅干などの加工品の販売。餅まきや餅つき大会、梅の種飛ばしなどのイベント開催。

組合員による梅うどんや、梅入ったこ焼なども販売してとても賑わいます。また、子供たちに地域農業を知ってもらおうと10年前から地元宮内小学校6年生を対象に梅加工体験を実施するなど、地域との繋がりも大切に思っています。

おわりに

今後の課題として、高齢化、後継者不足、耕作放棄地の増加に対処すべく「特定農業生産法人」として、農用地を有効活用しながら、将来を見据えた梅の生産・加工・販売体制を確立し、地域活性化の取組みを展開していきたいと思っています。

地産地消の小さな産地だからこそ、安全でおいしい農産物を作り、消費者の信頼を得る事が大事。小さな産地だからこそ、全員で取り組むことが大事だと思います。

これからも、七折小梅を中心に、小規模ながら近隣に類を見ない優良産地が形成され、農業経営が安定することを目指し日々奮闘することがノウハワを教えて頂いた元徳島試験場の村上来先生や徳島県の農家の方への恩返しだと考えています。

※愛媛大学の現役女子大生が興味を持ち毎週のように勉強にきています。このような若い人の声も取り入れ、組合の活性化に努めてまいりたいと思っています。



小学生の梅加工体験